

(共同討議) フィヒテの根源的洞察再考—故ディーター・ヘンリッヒ海外特別会員を偲んで

## 本討議の意義

大橋 容一郎

この共同討議は、われわれ日本フィヒテ協会の海外特別会員でもあった、故ディーター・ヘンリッヒ博士(1927年1月5日—2022年12月17日、享年95歳)の学問的業績を回顧し、その哲学的思考の意義をあらためて省察するために開かれた。

周知のように、ヘンリッヒ氏は長年にわたり、カントおよびドイツ観念論の哲学的伝統と問題意識を受け継いだ研究を行い、ベルリン・フンボルト大学(1960-65)、ハイデルベルク大学(1965-81)、ミュンヘン大学(1981-1994)の教授を務め、国際ヘーゲル協会の会長でもあった、現代でもっとも重要な哲学者の一人である。また氏は、直接に氏と語り合っただけでその薫陶を受けた者に限らず、われわれの学会の会員の多くに多大な学問的影響を与えてきた。筆者自身も1980年代前半に、「自己意識と自己保持」に関する研究報告と質疑の場に参加して、氏の問題意識に強い感銘と影響を受けた者の一人である。

ヘンリッヒ氏は、ドイツ・ロマン主義の哲学や文芸資料を発掘する『イエナ・プロジェクト』を立ち上げ、その推進によって思想史研究における画期的な業績を挙げた。他方でより内在的な哲学研究として、氏は1950年代半ばから「自己意識」論の研究を進め、デカルトからカントに至る自己意識の諸理論である「自我の反省理論」を批判的に検討してきた。氏はその中で、カントの超越論的主観性の概念がもつ「認識的自己関係Das wissende Selbstverhältnis」論の不備と誤謬を指摘し、フィヒテが『知識学』における「根源的洞察」を通じて、近代の自我理論および主体性の哲学に新たな展望を開いたことを解明した。

より詳細に言えば、カントが超越論的な論証に基づいて、自己反省と自己意識が示す明証性を「超越論的自我」の特性として単純に同一化していたことに対して、ヘンリッヒ氏はフィヒテの立場を重視して、超越論的自我の自己定立を反省以前の根源的なものとして見直し、さらに認識における主体性の存在仕方をより重層的なものとした。この問題を論じたヘンリッヒ氏の論文「フィヒテの根源的洞察」は、1966年に発表されて以降、1982年に論文集『自己関係』に「フィヒテの自我」として再録され、1986年には座小田豊、小松恵一両氏による日本語訳の論文集『フィヒテの根源的洞察』として出版された。この論文は出版当初から、フィヒテ哲学の研究者にとどまらず、カントおよびドイツ観念論、さらには神学の分野にも多大の影響を与え、広範な議論を巻き起こすことになった。

その一方で、ヘンリッヒ氏自身は、フィヒテが獲得した自我への根源的洞察の立場にとどまることなく、フィヒテの洞察自体に対しても批判的吟味を継続して、自我の自己定立と自己保持を可能にする根拠として、自己意識の哲学を展開させることになった。1990年代以降30年間にわたって続けられてきたその自己吟味の中で、ヘンリッヒ氏は、フィヒテ自身の知識学の原理が自我論から絶対者論へと移行して行ったのとは異なって、むしろあくまで自己意識論としての自我論にとどまろうとする姿勢を見せるようになる。そうした思想の展開を示し、氏自身の自我論の

いわば集大成ともなったのが、2019年に刊行された著書『この自我は多くを語る』だった。この著作の冒頭部分には1966年の「フィヒテの根源的洞察」がそのまま再録され、いわば自分自身の従前の見解を再吟味して行くという、フィヒテの『知識学』の歩みと同様な思想の展開が示されている。

以上のような事情を踏まえて、今回の共同討議において、『フィヒテの根源的洞察』から始まるヘンリッヒ氏の批判的思索の展開を概観した上で、『この自我は多くを語る』におけるその最終的な展開の様相をわれわれに見せてくれるのが、櫻井真文氏の提題「ヘンリッヒの最終見解——『この自我は多くを語る』」である。カントからフィヒテに至るまでの哲学理論に詳しい櫻井氏は、ドイツおよび日本において『知識学』の原理を研究する中で、真っ先にヘンリッヒ氏の新しい見解に着目し、その重要性に着目された。2000年以降になって、「遂行的解釈」や「匿名的意識理論」から「思弁的形而上学」に至るまでの、ヘンリッヒ氏思想の変遷をたどる今回の報告内容は、何よりも『知識学』の研究者にとって根本的な問題提起となるものだが、それにとどまらず、近代の認識論や自己意識論の原理に関心を寄せるすべての哲学研究者にとっても、興味の尽きない内容となっている。

行論の都合で記述の手順が逆になったが、湯浅正彦氏による今一つの報告は「思弁と自我——『全知識学の基礎』第一部第一章に即して」と題されている。その題目にはヘンリッヒ氏への表立った言及はないが、さらに深く大きな意義がある。この報告のテキストはまさに、ヘンリッヒ氏が自己意識の問題に取り組んだ『知識学』の該当箇所であり、そこに記述された自我の自己活動をどのように理解するかによって、フィヒテの哲学全体に対する研究態度がまったく異なってしまう箇所だからである。しかしこの箇所の理解のためには、ヘンリッヒ氏と同様に、デカルト以降からとりわけカントの理論哲学に至る「反省理論」の研究が不可欠となる。湯浅氏は周知のように、カント哲学の研究者としてすでに日本を代表する学者の一人だが、2008年に刊行された氏の著書『超越論的自我論の系譜』は、「カント、フィヒテからヘンリッヒへ」という副題が示しているように、カントやフィヒテに関するヘンリッヒ氏の思索の道行きを独自の仕方でもり直して、湯浅氏自身の自我論に到達しようと苦闘した論考である。ヘンリッヒ氏の思索の道行きを再検討するにあたり、氏と同様な経路をたどって独自の思索を続け、晩年のヘンリッヒ氏に直接接したこともある湯浅氏は、まさに今回の共同討議の提題にきわめて相応しい研究者であると言えよう。